

英 語（リスニング）

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和3年度大学入学共通テスト（以下「本テスト」という。）の「英語（リスニング）」の受験者は、共通テスト(1)が474,484人（昨年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は512,007人）で、受験者全体の約98.3%（昨年度は97.2%）に当たる。このことは、本テストの実施そのものや、問題の質や難易度、使用される言語材料等が、センター試験から引き続き、受験者のみならず、全国の高等学校関係者及び英語教育関係者等、多方面に与える影響が非常に大きいことを意味している。満点は「英語（リーディング）」と同じ100点となり、共通テスト(1)の平均点は56.16点であった。

共通テスト(1)「英語（リスニング）」について検討・評価した項目は、内容・範囲、分量・程度、表現・形式についてである。また評価の視点として、以下の5つの事項を主なよりどころとした。

- ・ 高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編 平成22年5月（以下「学習指導要領」という。）
- ・ 令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針
- ・ 「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「英語表現Ⅰ」の検定教科書
- ・ 令和2年度大学入試センター試験「英語（リスニング）」（本試験）
- ・ 令和2年度大学入試センター試験 試験問題評価委員会報告書（本試験）

2 内 容・範 囲

本テストは、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「英語表現Ⅰ」の検定教科書等でよく扱われる内容・範囲が網羅されており、高等学校段階における「聞く力」の領域を中心とした学習の成果を測るものとしておおむね適切であった。日常的な話題から社会的な話題に至るまで、語彙や文法の正しい知識を基に、情報活用能力を働かせながら、目的に応じて概要や要点、話者の意図などを捉える必要のある、思考力・判断力・表現力等を問う内容であった。

第1問Aは、短い英文を聞き、その内容として最も適切なものを選択肢から選ぶ問題である。英文は比較的平易であったが、発話内容全体及び選択肢の正しい理解と話者の意図を適切にくみ取る思考が必要となる。どの英文も日常生活において発せられる表現で、受験者にとってなじみのあるものである。第1問Bは、英文を聞き、その内容と最もよく合っている絵を選ぶ問題である。比較的平易な英文であったが、語彙や文法の正しい知識を活用して、英文の表す状況を頭の中で正しく描けることが求められる。

第2問は男女2人の短い対話を聞いて、問いの答えとして最も適切な絵を選ぶ問題である。場面を想定しながら対話を聞き、状況を正しく理解した上で物や場所を正しく判断する力が問われている。日常生活の場面を内容とした対話で、受験者になじみのあるものである。

第3問は、男女2人の対話を聞いて、書かれている質問の答えとして最も適切なものを選ぶ問題である。対話の場面を思い描きながら対話を聞くと同時に、書かれている質問と選択肢に目を通し正しい解答を選択する必要がある。日常生活の場面を内容とした対話で、受験者になじみのあるものである。

第4問A 問18～21は、やや長めのモノローグを聞き、円グラフを完成させる問題である。円グラフは何を表しているのか、選択肢には何があるのかを理解した上で、音声から数値を扱った重要

な情報を聞き取り整理する能力が求められる。学校における授業の場面のモノログであり、受験者になじみのあるものである。問22～25は、やや長めのモノログを聞き、表を完成させる問題である。表が何を表しているのかを理解した上で、音声から必要な数値に関する情報を聞き取り整理する能力が求められる。留学先のホストファミリーが営む家業の手伝いをするために説明を聞いているという場面で、内容面において受験者の負担になることは特でない。第4問Bは、4人の発話を聞き、示された条件に最も合うものを選ぶ問題である。話者の意図を正確に理解し、必要に応じてメモをとりながら、条件に合致する最善のものを判断する力が求められる。発話の内容はニューヨークのミュージカルに関する一般的な情報であったため、負担のかかるものではない。

第5問は、社会的内容を扱った長めの講義を聞き、その概要や要点を捉えまとめる力が求められる問題である。本テストが、大学での学修に必要な能力を測ることを目的の一つとしていることから、大学入学後に必要となる講義の概要や要点を理解する能力を測るという点で出題意図が理解できる問題である。しかし、hyggeに関する受験者の背景知識の程度によって理解度が左右される可能性のある問題であった。

第6問Aは、男女2人のやや長めの対話を聞き、要点を把握する問題である。何を問われているのか、どのような情報に注意して聞くべきかを理解した上で、音声からの確に必要な情報を聞き取り整理する力が求められる。対話の内容は留学中の滞在先に関するもので、受験者にとっては検定教科書等でもなじみのある話題である。第6問Bは、男性2人、女性2人の合計4人の討論を聞き、トピックに賛成した人の数を答える問題と、4人のうちの1名の意見を最もよく表している図を選ぶ問題の2問である。何を問われているのか、どのような情報に注意して聞くべきかを理解した上で、音声からの確に話者の意図や要点を聞き取り整理する力が求められる。高等学校の授業で推奨されているディスカッションやディベートに近い場面設定であり、内容も検定教科書等において頻繁に扱われる環境問題につながる内容（レシートや紙資料の電子化）で、受験者にとってなじみのあるものである。

3 分量・程度

読み上げの回数は2回と1回の混在となり、総マーク数は37となったが、受験者に大きな負担がかかることはなかった。また、受験者が聞き取る総語数についても、試験の時間に対して適切な分量であった。難易度の高い問題が部分的に含まれていたが、全般的には、学習指導要領において育成することを目指す資質・能力を踏まえた、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが必要となる、標準的で良質な問題が出題されていた。

第1問Aでは4問が出題された。全体的に標準的な出題で、分量も難易度も受験者の大きな負担となるものはなかったが、問3と問4は受験者にとってやや難易度が高かったと思われる。第1問Bでは3問が出題され、各設問に使用された語数は12語程度と受験者に負担がかからない適切な分量であった。いずれの問題も取り組みやすかったと思われる。

第2問では4問が出題された。それぞれ30語程度の対話であり、受験者にとっては取り組みやすい適切な問題であったと思われる。

第3問では6問が出題された。それぞれ50語程度の対話であった。流れる音声は1回になったが、各対話の前後に長めの時間が設定されていたため、受験者への負担はさほど大きくならなかった。問13については、記載されている場面設定だけでは本文の内容がイメージしにくかったことに加えて、情報が複雑なものとなっていたために難易度が高かったが、それ以外の問題については標準的な難易度であったと思われる。

第4問Aの問18～21では、90語程度のモノログが出題された。受験者が考える時間もやや長め

に設定されており、適切な配慮がなされていた。内容は本テストの問題作成方針に沿った適切なものであったが、数値を扱う問題であったため、やや難易度が高かったと思われる。問22～25は、70語程度のモノログが出題された。細かな部分の聞き取りが必要とされ、やや難易度は高かったと思われる。第4問Bは一人当たり40語程度の、4人によるモノログが出題された。リード文の後に状況と条件を読む時間が適切に設定されていた。的確な判断力が要求される問題であったため、やや難易度が高かったと思われる。

第5問では300語程度の講義が出題された。リード文の後及び講義の前半終了後に、それぞれ1分程度の時間が設けられており、受験者が問いや図表を読んだり、解答したりする時間は適切であった。また流れる音声は、実際の講義の場面に合った読み方となっていたため、受験者にとっては聞きやすいものであったと考えられる。しかし、社会的な内容であったことに加え事前に目を通す範囲についてリード文から読み取ることが難しかったため、受験者にとってはやや難易度が高かったと思われる。

第6問Aでは180語程度の対話が出題された。リード文の読み上げ後から問題音声が流れるまでに十分な時間があったため受験者の負担は大きくなることはなく、適切な出題であった。第6問Bでは、190語程度の討論が出題された。音声の前後に長めの時間が設定されており、受験者が考える時間は適切に設けられていたが、話者の一人であるYasukoが日本人であると想定できたことから、対話の内容を理解する上で受験者が文化的なコンテキストを反映させた可能性があること、また討論における「中立」の立場に慣れていなかった可能性もあることなどが、話者の立場を判断する際の迷いにつながったものと思われる。

4 表現・形式

イラストや英語の語句、文による多肢選択の設問形式で、説明を聞きながら情報を整理して図表に情報を付加したり、ワークシートにメモを取ったりするなど、高等学校や大学での英語による授業の場面等が適切に設定されていた。第2問から第6問までは、モノログや対話の場面や状況が日本語で示され、コミュニケーションの場面を想像しやすい配慮がなされていた。選択肢やイラスト、図表、ワークシートも可能な限り分かりやすくシンプルにする工夫がなされていたと言える。使用された英語の表現は学習指導要領に示された範囲内の表現であり、アメリカ式発音とイギリス式発音、英語を母国語としない話者による読み上げが混在していた。6問から成る大問は、短いモノログや対話を2回聞くものから、長めのモノログや対話を1回のみ聞くものまで、難易度の比較的低いものから高いものへと配列されている一方、基礎的な内容の問題にも3点から4点の配点があり、幅広い受験者層に対応するよう工夫されていた。

第1問Aの SCRIPT と選択肢には比較的平易な表現が使われており、音声は2回流れるため比較的容易だが、音声的な理解だけでなく状況を判断する力を問う良問であった。問3や問4では、文脈からの状況判断や音声的な違いの聞き分け、選択肢の正確な読み取りの不足による誤答が目立った。第1問Bは、状況に合うイラストを選択する問題であり、イラストもおおむね分かりやすかった。問5は、almostの聞き取りができなかったことと意味の理解不足が誤答につながった可能性がある。

第2問は、対話の場面が簡潔な日本語で問題用紙に示されており、短い対話の後に流れる質問に合致するイラストを選択する問題である。問10のように対話の内容から“these”や“this”を推測させる問題も、“dirty”や“sunny”という明確なキーワードから正答を選択できるように工夫されていた。

第3問は、音声は一度のみ流れ、全ての対話がA－B－A－B形式であった。対話の場面（簡潔な日本語）と質問（英語）が問題用紙に示されており、対話を聞いて質問の答えを選択肢から選ぶ

問題である。問14ではアメリカ英語でよく使用される“I sure did.”のような口語表現や、問15と問17ではイギリス式発音を使用するなど、音声上の多様性にも富んでいた。しかし、問13では、“boxes”の大きさ等を具体的にイメージしにくかったことや、問15では2往復の対話を聞きながら読むには長めの選択肢であったことから、「聞く力」以外の負荷が過度にならないよう引き続き配慮をお願いしたい。

第4問Aでは、あらかじめ問題文とグラフを読む時間が与えられ、音声は一度のみ流れる。日本語で書かれた問題文に場面が示され、モノローグを聞きながらグラフに当てはまる情報を語句の選択肢から選ぶ問題である。“exactly half that percentage of students”や“came after…”などの表現を聞き取れるかどうかを鍵となるが、4つの解答が互いに関連しているため、4問完答で4点という配点は妥当であると言える。モノローグは、グラフのタイトルや選択肢となっているラベルを述べるところから始まり、受験者に聞く準備をさせる配慮がなされていた。英語自体にそれほど難しい語句は使用されていないが、最後まで注意して聞くことによって正解できるように工夫されていた。第4問Bでは、状況と条件を読む時間が与えられ、音声は一度のみ流れる。状況と条件は日本語で示されており、4人のモノローグを聞いて条件に当てはまる選択肢を選ぶ問題である。「人気がある」ということを伝えるために“(it) has very high ticket sales.”や“I’ve seen some good reviews about it.”といった表現を用いるなど工夫されている。

第5問では、音声は一度のみ流れる。長めのモノローグ（講義）を聞き、ワークシートに付加する情報と概要を把握する問題の後、講義の続きを聞いて、新たに示されたグラフと講義全体の関連を理解する問題が続く。問32までと33は別々に解答する問題であるかのように見えるが、問33には「講義全体の内容から」と最初のモノローグの理解をも問う指示があり、問33と表をどのタイミングで読んでおくべきか、受験者の混乱を招いた可能性がある。

第6問では、音声は一度のみ流れる。第6問Aでは、二人の対話を聞き、話し手の意図と対話の流れを捉える力を測る問題であった。対話中の“it doesn’t matter”という表現が、選択肢では“it shouldn’t be a priority”となるなど、言い換えられた表現を理解する力も求められた。第6問Bでは、男女2人ずつ計4人の意見交換を聞き、最終的に賛成した人数と男性のうちの一人の発言の趣旨を図表から選ぶ問題である。男性二人の声が若干似ており、誰が話しているのかが、次の話者の呼びかけによって判明することが多かったことが、受験者への過度な負荷となった可能性がある。また、恐らく日本人女性の設定であるYasukoの“I don’t know what to think, Luke. You could request a paper receipt, I guess.”という発言が、「実際にはレシートの電子化に賛成しているが、Lukeへの気遣いから曖昧な返事をしているのだろう」という憶測や様々な解釈を生んだ可能性がある。

5 ま と め（総括的な評価）

(1) 形式等の特徴

本テストにおいては、実施時間は30分のままセンター試験からの変更はなかったが、1問当たりの配点に1～4点の幅を持たせるとともに、読む回数も2回読み（第1問と第2問）と1回読み（第3問～第6問）に分け、満点は100点となった。本テストでは「リーディング」と「リスニング」がともに100点満点で構成されていたことから、より英語4技能のバランスを意識したものであったと評価する。また設問や場面設定の指示が日本語で記載されている点は、測る力を「聞く力」に集約するための措置として有効である。

(2) 学習指導要領との整合性

本テストでは、モノローグ、2人の対話、講義、4人の討論といった様々な場面や状況が設定された。また、イギリス英語や英語を母国語としない話者の音声が入り入れられた。これらの点

は、学習指導要領に定める「内容」や「言語材料」に基づき、高等学校の学習指導において留意されるべき事柄が明確に出題に反映されたものであったと評価する。

(3) 高等学校の授業改善への影響

本テストでは、与えられた状況やコミュニケーションの場面における発話から情報を整理し、内容全体から話者の意図等を把握する、思考力・判断力・表現力等を問う出題が多く見られた。

授業では、様々なタイプの英語を聞いたり読んだりする活動はもとより、聞いたり読んだりした内容について話したり書いたりするような活動を十分に行うことにより、話される内容を一度で正確に聞き取る力の伸長が図られる。その意味で本テストは、高等学校の授業では「聞く力」だけに特化した指導ではなく、残りの3技能と統合した言語活動を行うべきというメッセージを持つと思われる。また本テストでイギリス英語や英語を母国語としない話者の音声が含まれたことは大変良い傾向である。インターネット等を活用し、実際のコミュニケーションにおける現代の様々な英語の音声に触れる機会を設けるなど、授業で扱う教材の工夫が必要となるだろう。

発言者の主張を表すグラフを選ぶ問題（第6問の間37）は、高等学校での教科横断型指導や課題探究型指導の充実にもつながるものであった。英語をアウトプットのツールとして生徒が主体的に使う場面を想定した授業設計や指導の在り方が高等学校の現場に求められていると考える。

(4) 要望・提案

今後とも、日常生活で用いられる自然な表現を採用したり、大学生生活等におけるコミュニケーションの場面や話者の多様性を想定したりする一方、受験者の生活環境や居住地区の多様性に配慮した問題を作成していただきたい。また、ジェンダーに配慮した問題作成を継続していただくとともに、受験者の持つ背景知識の程度により、聞き取る内容の理解に大きな差が出ないようにしていただきたい。設問に直接関係しない限り、写真やイラストなど背景知識を補うものがあるとよいだろう。

大問6の4人の討論の場面は、姿が見えない4人の話者をより明確に識別できる音声的な工夫をしていただきたい。また、中立の立場の話者がいる場合には、そのことが明示的になるようにしていただきたい。

読み上げ回数については、国内外で実施されている英語の試験の多くが1回読みであることから、全て1回読みにして問題数を増やすことで、本テストの妥当性(Validity)と信頼性(Reliability)を高めることができるかもしれない。しかしながら、第1問と第2問の2回読みの部分で英語の音声に慣れて解答のリズムができるため、現在の2回読みと1回読みの混在が、受験者にとって解答しやすいものであるとも考えられる。

状況や設問等を読む時間が最初に与えられる問題については、多様な受験者に配慮しながら、黙読時間とどこまであらかじめ目を通すべきかを可能な限り示す工夫をしていただきたい。

出題内容と設問数，配点一覧（*は，全部正解の場合のみ点を与える。）

設問及び出題内容				設問数		配点		
大問	中間	小問	出題内容概要			小問 配点	配点	
第1問	A	1-3	モノログ（短）：状況に合う短文を選択	4	7	4	16	25
	B	4-7	モノログ（短）：状況に合うイラストを選択	3		3	9	
第2問		8-11	対話（短）：対話後の質問に合うイラストを選択	4	4	4	16	16
第3問		12-17	対話（短）：書かれた質問に合う答えを選択	6	6	3	18	18
第4問	A	18-21	モノログ（中）：グラフと表への情報付加	4	9	4*	4	12
	A	22-25		4		1	4	
	B	26	モノログ（中）：4人のモノログを聞き状況と条件に合う答えを選択	1		4	4	
第5問		27	モノログ（長）：講義を聞き，ワークシートへの情報付加，要約選択	1	7	3	3	15
		28-29		2		2*	4	
		30-31		2		2*		
		32		1		4	4	
		33		1		4	4	
第6問	A	34-35	対話（長）：対話を聞き要約選択，応答選択	2	4	3	6	14
	B	36-37	対話（長）：4人によるディスカッションを聞き賛否数，意見を表す図を選択	2		4	8	
共通テスト(1)平均点 56.16点				37		100		

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国英語教育研究団体連合会

（代表者 鈴木 真人 会員数 約60,000人）

T E L 03-3267-8583

1 前 文

1990年から2020年まで実施された「大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）」が廃止され、2021年より「大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）」が新たに開始された。外国語〔英語〕については、幾つかの変更点があった。

従来の「筆記」が「リーディング」に変更され、配点も200点から100点となり、さらに「発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しない」など出題内容についても変更があった。

「リスニング」については名称の変更はなかったが、配点が50点から100点へと倍増し、「多様な話者による現代の標準的な英語を使用する」という観点から「イギリス英語」も使用され、さらに「1回読み」問題が導入されるなど内容的な変更があった。「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という共通テストの出題方針が色濃く反映されたものとなり、形式・内容ともにこれまでのセンター試験とは大きく変わっている。2回の試行調査が実施されたものの、初めての試験形式に臨んだ受験者たちの不安や緊張感は察するに余りある。今後も、必要な情報を迅速に丁寧に開示していただくことを切に希望する。

高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）では「実践的コミュニケーションの育成」に重点が置かれ、高等学校にける英語教育においては、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」「話すこと」の4技能を総合的に採り入れた授業形態が一般に進みつつある。また、現行の学習指導要領下では「英語で授業を進める」ことが明文化され、今までより一層「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」が重視される教育課程や授業が期待されている。この実践的な英語教育を推進する大きな流れの中で、センター試験へのリスニング・テスト導入が実現して15年が経過し、様々な困難を乗り越えて、今年度より共通テストの「リスニング」として新たなスタートを切ったことは、わが国の英語教育の未来にとって大きな出来事である。

大きな課題として記すべきは、今年度の稼働が予定されていた「大学入試英語成績提供システム」導入の見送りである。今般の共通テストにおいては4技能のうち「読むこと」「聞くこと」のみを問うており、平成29年7月に示された「大学入学共通テスト実施方針」における「高等学校学習指導要領における英語教育の抜本改革を踏まえ、大学入学者選抜においても、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を適切に評価する」という方向性が確立されているという状況にはなく、早急に方向性が示される必要がある。グローバル人材の育成を目指した英語教育改革が進む機運を減じることなく、さらに加速させていくものとしてもらいたい。

2021年度の共通テスト利用大学・短期大学は、前年度センター試験時から9校増の866校と過去最多となった。内訳は、国立大学が82校、公立大学が91校、私立大学が533校、公立短期大学が13校、私立短期大学が142校、公立専門職大学が1校、私立専門職大学が4校である。今後も利用が進んでいくことが予想される。受験者数は共通テスト(1)（1月16・17日）が482,546人で、共通テスト(2)（1月30・31日）が2,025人であり、総受験者数は484,114人で前年度の527,072人から約8パーセントの減少となった。「英語（リーディング）」受験者数（昨年筆記）は477,868人（前年度518,579人）であり、「英語（リスニング）」受験者数は476,167人（前年度512,181人）であった。リーディングは全

受験者数の約99パーセント、リスニングは約98パーセントが受験しており、英語の成績が文系理系を問わず全ての受験者の大学合否に大きく関与している。

平均点は、一昨年度が31.42点（100点換算で62.84点）、昨年度は28.78点（100点換算で57.56点）、今年度の平均点は56.16点であり、前年度より－1.4点と僅かに下がったものの、ほぼ横ばいということができる。平均点と難易度は直結するものではないが、難易度についてもほぼ前年度並みであったと言える。

読み上げられた英語の総語数は約1,520語（昨年度は約1,140語）で大幅に増加し、設問と選択肢の総語数は約700語（昨年は約600語）で、こちらも増加となった。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

試験問題の構成は大きく次のようなものであった。

大問	配点	マーク数	出題内容	読み上げ回数
1	25	4	A:短文内容一致問題	2
		3	B:短文イラスト問題	
2	16	4	対話文イラスト問題	2
3	18	6	対話文選択問題	1
4	12	8	A:モノログ図表完成問題	1
		1	B:複数のモノログ選択問題	
5	15	7	講義内容選択問題	1
6	14	2	A:2者対話文選択問題	1
		2	B:4者対話文選択問題	
合計	100	37		

大問数は昨年の4問に対して6問となり、マーク数は12増えて37となった。配点も昨年の倍の100点である。また、第3問以降の読み上げ回数が1回になり、センター試験と大きく変化した部分もある。

第1問 短い発話を聴いて、内容に関する選択肢を選ぶ問いである。Aは短い発話を聴き取り、設問の問いに最も適する選択肢を選ぶ問題。状況を要約したり、発話のやり取りから導くことのできることを判断したりする力が求められた。Bでは短い発話を聴いて、設問で求められる内容に合致する絵を選ぶ問題であり、内容を正確に把握する力が問われた。難易度としては標準レベルであり、設定も日常的なものであり、短い発話から状況や情景を把握させ、絵という視覚情報を選択させるという設問形式は好ましいものである。ただし、短い発話であるため、やや唐突に始まる印象がある。最初の問題はできるだけイメージしやすい設定の問題から初めて、徐々に英語に耳を慣らしていくような流れが望ましい。

問1 男性の「ジュースがもう少し欲しい」という発話を、The speakerを主語として客観的に説明する文章を選ぶ問題。

問2 “How about～”の表現から、話者の意図をくみ取る問題。

問3 Yujiが卒業後どうするかを問う問題。選択肢の内容が似通っているため、正確な聴解が求められている。

問4 発話からDavidの行動を時系列の点から把握する問題。

問5 「ほとんどの人が帽子をかぶっている」という発話に合致する絵を選ぶ問題。

問6 Nancyが「縞模様」と「動物柄」以外のTシャツを買おうとしている状況を把握し、合致する絵を選ぶ問題。

問7 少女の母親が自らの自画像を描いていることを把握し、少女の位置関係を把握し、その内容に合致する絵を選ぶ問題。

第2問 短い対話を聴き、設問に合致するイラストを選ぶ問題。日本語で示されている場面の情報を把握し、聴いた内容から適切なイラストを選ぶという複合的な作業を求めている。これまでもあった形式ではあるが、設問に示されている日本語の情報把握が重要であるため、今後受験者はこの形式に慣れておく必要がある。短い時間の中で、複合的な作業を素早く行うことを要求しているため、与えられる状況は日常生活に根差している事柄や、現代的なテーマを用いることによって、受験者にイメージしやすいものが設問とされることが望ましい。難易度としては標準レベルであるが、イラストの設定については、思考に不必要な負担をかけることのないように、今後も工夫されることを期待する。

問8 水筒の形状を把握して適合するイラストを選択させる問題。

問9 コンテストで投票すべきロボットの形状を把握して適合するイラストを選択させる問題。問8で求めている力と同種の問題。両問ともテーマは適切である。

問10 夏の地域清掃に持っていくものについて把握して適合するイラストを選択させる問題。日本語で示されている説明を把握することが前提となる問題。

問11 車いすを使用している男性が駅員にエレベータの位置を尋ねている問題。場面設定や設問内容は適切ではあるが、イラストにおけるロッカーやトイレのピクトグラムを瞬時に判断する必要があったため、戸惑った受験者もいたかもしれない。特に「ロッカー」のピクトグラムは受験者にとってはあまりなじみがないと思われる。設問上は明らかではあるが、複合的な作業を求めている以上、聴解とは離れたところでの思考が負担になることは望ましくない。その点は今後も御配慮いただきたい。

第3問 短い対話を聴き、設問に合致する最も適切な選択肢を選ぶ問題。第2問と同様に、日本語で示されている場面の情報を把握し、概要や要点を目的に応じて把握する力が問われている。またこの問いでは、出題方針で予告されていた「イギリス英語」が使用されている。短い対話を聴き、設問に合致するイラストを選ぶ問題。日本語で示されている場面の情報を把握し、聴いた内容から適切なイラストを選ぶという複合的な作業を求めている。「多様な話者による現代の標準的な英語」を使用するという点で、新傾向は好ましいものであると考えるが、アメリカ英語でのやり取りが続いている中で、唐突に始まってしまうと受験者にも戸惑いが生じる。今年度は「イギリスにいる弟」という設定であるが、こういった形を含めて受験者が取り組みやすい状況を作っていただけるとありがたい。さらに第3問以降は「1回読み」ということもあるため、聴解力を問う問題としてさらに慎重な問題作成をお願いしたい。

問12 ミュージカルの観劇に行けるように調整しようとしている対話。

問13 夫婦が台所で食料品を片づけている場面で、その食料品を格納する位置関係を把握する問題。

問14 会議がキャンセルになったことについてのeメールのやり取りを把握する問題。

問15 「イギリスにいる弟が、東京に住んでいる姉と電話で話をしている」という場面設定においてアメリカ英語とは異なるアクセントの英語が使用されている。今回の「イギリス英語を使用する」という方針を反映したものであるが、新しい傾向の出題に戸惑った受験者もいたかもしれない。場面設定は適切であった。

問16 野球観戦のチケットについてやり取りする問題。

問17 ある俳優を通りで見かけた場面でのやり取りを把握する問題。問15と同様にここでもアメリカ英語とは異なるアクセントの英語が使用されている。多様な話者による現代の標準的な英語の理解を求める傾向は好ましいものであるが、それらが使用される設定や必然性について、受験者が唐突な印象を受けることなく問題に取り組むことのできるように、さらに御考慮いただきたい。

第4問 Aは読まれる説明を聴き、図表を見ながら空所を埋めていく問題。数字や数についてメモを取って聴き取る力が問われている。Bでは、4人の話者の説明を聴き、設問に合致する選択肢を選ぶ問題。複数の情報を聴き、情報を比較しながら思考する力が問われている。聞き取った内容と資料を結び付けて考えさせる問題は、日々の授業運営にも影響を与えるものとして望ましいと考えているが、解答にはある程度の時間がかかることも確認されたい。問題文と図表を読む時間は与えられているが、聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短い。聴いているうちにどの人の発言だか分からなくなった、せっかく聴き取れても、正解にたどり着かなかったという受験者の声も聞こえてきている。上にも述べたとおり、聴解力とは異なる点で受験者に負荷をかけすぎる出題は再考頂きたい。また、出題の方向性は好ましいものであるので、解答時間についてさらに検討をお願いしたい。

問18～21 「学校外で学生たちはどのように過ごすか？」という問いに対する先生の講義を聞いてグラフや表を完成させる問題。

問22～25 「留学先のホストファミリーが経営しているDVDショップで、DVDの値下げについての説明を聞いている場面」でのやり取りを聴き、表を完成させる問題。最後に付加される「星印がついた商品は人気があるため、一律10パーセントオフ」という情報が、1回読みで把握するには難しいと感じた受験者はいたと思われる。

問26 旅行先のニューヨークで見るミュージカルを一つ決めるために、4人の話者の提案を聴きとる問題。示されている表を活用することを前提としている部分については、望ましい設定であると考えられる。

第5問 「アメリカの大学で、デンマーク人の幸福観についての講義」を聴き、設問に合致する最も適切な選択肢を選ぶ問題。ワークシートとして示されているものを活用して、ノートテキングをすることが必要になる。聴き取った内容とグラフから読み取れる情報を組み合わせて要点を把握する複合的な作業を必要とする。日々の授業運営にも影響を与えるものとして望ましい出題であるが、前問と同様に、問題文と図表を読む時間は与えられているが、聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短い。第4問同様、せっかく聴き取れても、正解にたどり着かなかったという受験者の声も聞こえてきており、その点は再考をお願いしたい。

問27～32 ワークシートに入るべき事項を選択肢から選ぶ問題と講義の内容を選択させる問題。1回読みであるため、情報の処理時間及び解答行動に時間を要し、次の設問への十分な準備が難しかったと思われる。

問33 図から読み取れる情報と講義全体の内容から言えることを選択する問題。問題自体は平易であるが、前述のように設問に十分対応する時間があつたかどうかについて再考をお願いしたい。

第6問 Aは2人の会話を聴き、設問に合致する最も適切な選択肢を選ぶ問題。話者の発話の要点を把握する力が問われている。Bは4者の会話を聴き取り、設問に合致する最も適切な選択肢を選ぶ問題。それぞれの話者の賛否の立場を正確に把握し、意見に合う図表を判断する力が問われた。問題の方向性としては好ましいが、4者の会話において「誰が話しているか」を把握することが難しかった。名前を呼びかけているため、話者の特定は可能だが、一定の長さの

会話文であるため誰が話しているかを把握し続けるのを難しく感じた生徒が少なくないと思われる。前問と同様に、せっかく聴き取れても、正解にたどり着けなかったという受験者の声も聞こえてきており、その点は再考をお願いしたい。

問34～35 日本語で書かれた状況を踏まえて、話者の主張の要点と合致する選択肢を選ぶ問題。

問36 4人の話者のうち、何人が賛成したかを問う問題。

問37 会話の内容を踏まえて、ある話者の意見を反映している表を選択する問題。

3 ま と め

「大学入学共通テスト問題作成方針」に示されているように、「高等学校教育の指導のねらいとする力や大学教育の入学段階で共通に求められる力を踏まえたものとなるよう、出題教科・科目において問いたい思考力、判断力、表現力を明確にした上で問題を作成する」という方向性は今回の共通テストにおいて明らかに反映されている。こういった傾向は望ましいものであり、教育現場での授業改善にも確実に繋がっていくものであると評価したい。ただし、思考力を問うことが目的でありながら、結果的に情報を処理する能力や、さらにそれを速く行うことを求めるような問題設定となってしまうことは避けるべきである。今年度の問題では、結果的に情報を整理させる要素が強い設問や、設問間の時間が十分に取れないことによって思考する時間を確保するのが難しい設問、場面設定により話者の特定に苦勞する、といった設問もあった。1回聴き取った内容について複数の資料を読み解く点で受験者への負荷は高まっている。より基本的な聴解力が身につけているのかを評価するような問題作成もお願いしたい。「知識・技能」を十分有しているかの評価も行いつつ、思考力・判断力・表現力等を中心に評価する試験問題の作成に当たっては大変な御苦勞があるものと推察するが、これまでのセンター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしながら、受験者の学びの動機をさらに高める性質の作問をお願いしたい。グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められている背景を踏まえ、受験者が身につけるべき資質・能力を育成できるように、主体的な学びを促進する試験が安定的に作成されることを希望する。

第3 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 高等学校学習指導要領では、外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、実際のコミュニケーションにおいて、目的や場面、状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにすることを目標としていることを踏まえて、4技能のうち「読むこと」「聞くこと」の中でこれらの知識が活用できるかを評価する。したがって、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しないこととする。
- 「リーディング」「リスニング」ともに、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）を参考に、各CEFRレベルにふさわしいテキスト作成と設問設定を行うことで、A1からB1レベルに相当する問題を作成する。また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 「リーディング」については、様々なテキストから概要や要点を把握する力や必要とする情報を読み取る力等を問うことをねらいとする。
- 「リスニング」については、生徒の身近な暮らしや社会での暮らしに関わる内容について、概要や要点を把握する力や必要とする情報を聞き取る力等を問うことをねらいとする。音声については、多様な話者による現代の標準的な英語を使用する。

読み上げ回数については、英語の試行調査の結果や資格・検定試験におけるリスニング試験の一般的な在り方を踏まえ、問題の数の充実を図ることによりテストの信頼性が更に向上することを目的として、1回読みを含める。十分な読み上げ時間を確保し、重要な情報は形を変えて複数回言及するなど、自然なコミュニケーションに近い英語の問題を含めて検討する。全ての問題を1回読みにする可能性についても今後検証しつつ、当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で実施することとする。
- グローバル人材の育成を目指した英語教育改革の方向性の中で高等学校学習指導要領に示す4技能のバランスの良い育成が求められていることを踏まえ、「リーディング」と「リスニング」の配点を均等とする。ただし、各大学の入学者選抜において、具体的にどの技能にどの程度の比重を置くかについては、4技能を総合的に評価するよう努めるという「大学入学共通テスト実施方針」（平成29年7月）を踏まえた各大学の判断となる。

2 各問題の出題意図と解答結果

- ・第1問は、英語の特徴やきまりに関する知識・技能（特に文構造及び文法事項）に基づき、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い発話を聞いて、必要な情報や、発話内容の概要や要点を把握する力を問う。日常的な内容の文を聞いて、内容が合っている選択肢（セクションAでは文、セクションBではイラスト）を選ぶ問題である。

第1問の正答率はおおむね高かったが、問3や問4のように、複数の人物が登場する文において、誰が誰に対して何をしたか、という関係性の理解が不十分であったり、時系列を捉え、何が何より先に起きたことかを把握しきれなかったための不正解が目立った。このことから、受験者は個別の単語は聞き取れているものの、単語の間のつながりを解釈し、意味を正確に理解するための実践的な文法力において弱い傾向が見てとれた。
- ・第2問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報とイラストを参考にしながら聞き取ることを通じて、必要な情報を把握する力を問う。日常的な短い対話を聞

いて、設問に対する答えをイラストから選ぶ問題である。

本テストにおいては、得点率が最も高かった大問である。文脈が与えられ、対話の中で必要な情報が分散して示されていること、また選択肢がイラストであることがその主な理由であると考えられる。

- ・第3問は、身の回りの事柄に関して平易な英語で話される短い対話を、場面の情報を参考にしながら聞き取ることを通じて、概要や要点を目的に応じて把握する力を問う。日常的な対話を聞いて、対話内容に関する設問の答えとなる選択肢を選ぶ問題である。対話は言語の機能（例：依頼、誘い、感謝等）を軸に作られており、小問6題のうち、今回は問15と問17をイギリス英語による発音とした。

第3問全体の得点率は試験全体の平均点に近かったが、小問によって正答率が高いものと低いものが混在していた。問13では、どの食料品をどこにしまうのか、対話を聞きながら空間的な位置関係をイメージすることが求められたことから、他の小問に比べて正答率が低かった。

- ・第4問Aは、必要な情報を聞き取り、図表を完成させたり、分類や並べ替えをしたりすることを通して、話し手の意図を把握する力を問う。ここでは、授業外の時間に学生が何をして過ごしているのかを示すグラフに関する説明を聞き、ワークシートを完成させる設問と、DVDの値段の値引率についての指示を聞き、それぞれのDVDの値引率を表に書き入れる設問から成る。

グラフの設問は正答率が高く、第1問の文(2回読み)・第2問の対話(2回読み)・第3問の対話(1回読み)から、長めのモノログに移行する設問としてのつなぎの役割を果たせたとみなせる。表の設問は、年代別にDVDの値段が決定されるころまでは正解できたものの、「年代に関係なく人気のあるDVDは割引率が異なる」という「但し書き」の部分の聞き取りが不十分だった受験者が多かったのではないと思われる。

第4問Bは、複数の情報を聞き、最も条件に合う選択肢を1つ選ぶことを通じて、状況・条件に基づき比較して判断する力を問う。ここでは、4人の友人が薦めるミュージカルの説明を聞き、旅行先で見るミュージカルを決める。4人の話者のうち、一人はイギリス英語、一人は日本人英語の発音とした。この設問は、特に成績上位層の識別に有効であった。

- ・第5問は、身近な話題や知識のある社会的な話題に関する講義を聞き、メモを取ることを通じて概要や要点を捉える力や、聞き取った情報と図表から読み取れる情報を組み合わせて判断する力を問う。ここでは、幸せの指標と幸福観についての講義を聞く。講義を聞いて、内容理解・情報整理・論点把握をし、更に講義内容と図表情報の統合をすることが求められている。

相対的な難易度がやや高い大問であることから、全体的な得点率はやや低めであったが、より総合点が高い受験者による正答率が高く、より総合点が低い受験者による正答率が低い結果であったことから、能力の識別力が高かったと判断される。

- ・第6問Aは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、話者の発話の要点を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、留学の滞在先について意見交換をする二人の会話を聞いて、会話の趣旨を判断する。

第6問Bは、身近な話題やなじみのある社会的な話題に関する会話や議論を聞き、それぞれの話者の立場を判断し、意見を支持する図表を選ぶことを通じて、必要な情報を把握する力や、それらの情報を統合して要点を整理し、判断する力を問う。ここでは、紙のレシートの是非について議論する4人の意見交換の様子を聞き、話者の立場を判断する。

第6問Bでは、4人の話者が登場するが、男女の声に加え、アメリカ英語・イギリス英語・日本人英語の発音による区別と、会話の中でお互いの名前を呼び合うといった工夫がされた。ある

特定の話者の意見を支持する情報を選ぶ問37の正答率が、第4問～第6問の中では高かったことから、話者の区別は比較的よくできていたと思われる。紙のレシートに賛成している者の人数を問う問36はやや正答率が低かったが、これは話者の区別ができなかったためではなく、日本人英語の話者を賛成者であると誤って判断した受験者が一定数いたためだと推測される。このことから、受験者はこの話者が「情報（つまり事実）」を述べているだけで、紙のレシートに対する「賛否（つまり意見）」は述べてはいない、という区別が十分にできなかったものと考えられる。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

本テストについて、教育研究団体からは「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」という大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）の問題作成方針が色濃く反映されたものであり、「出題教科・科目において問いたい思考力・判断力・表現力等を明確にした上で問題を作成する」という方向性が明らかである点、そしてこういった傾向は望ましく、教育現場での授業改善にも確実に繋がっていくものである点が評価された。

また、高等学校教科担当教員からは、出題内容・範囲、問題の分量・程度、及び表現・形式についておおむね適切であったとの総評と併せて、本テストの特徴として、読まれた内容を構成するパーツとしての単語や表現をよりどころとして正解を選ぶタイプの出題ではなく、与えられた状況や場面において発せられた内容全体から話者の意図や要点を見極めて情報を整理し正解を選ぶ、思考力・判断力・表現力等を問う出題が多いことが挙げられた。

一方で、出題に関して幾つかの指摘もあったが、以下主な意見とそれに対する問題作成部会としての見解及び対応を述べる。

- ・第1問については、短い発話であるため、やや唐突に始まる印象があるとの指摘を受けた。これについては本テストを通じて、なるべく難易度の低い小問から徐々に難易度が上がっていくよう工夫をしているが、今後なるべくイメージしやすい設定の内容から初め、徐々に英語に耳を慣らしていける流れを作る方針を継続したい。
- ・第2問については、イラストやピクトグラムを分かりやすいものとするよう、引き続き配慮して欲しいとの意見があり、この点については今後も慎重に取り組みたい。
- ・第3問については、アメリカ英語でのやりとりが続いている中で、唐突にイギリス英語の会話が始まることに対して受験者に戸惑いが生じる可能性があることが指摘された。この点に対して、今回は「イギリスにいる弟」という設定を設けるなど、受験者が取り組みやすい状況を作る工夫をしており、今後も英語変種が使われることがより自然な状況設定をするなど、同様の配慮を続けたい。
- ・第4問～第6問については、聴いた内容から設問に取り組む時間はやや短いとの指摘を受けた。この点については、30分という限られた試験時間内に、いかに多くの設問を含めて信頼性を上げつつ、問題の状況設定や解答に求められている情報を明確に示すか、バランスを意識して問題作成を続けたい。
- ・第5問では受験者の背景知識の有無により理解内容に差が出ないように、との指摘を受けた。いかなるテーマを選択しても、必ず背景知識の量には個人差があるが、背景知識があってもきちんと聞かないと解けない問題と、背景知識がなくてもそれを補う工夫をした問題の作成を今後も目指すこととする。
- ・第6問Bでは、男性二人の声質が女性に比べると類似しており、誰が話しているのかが次に話す人の呼びかけによって判明することが多かったこと、また、日本人英語話者の発言が賛否いずれで

もないことがもう少し明示的なほうが良いことが指摘された。こうした点についても今後とも留意する。とりわけ4人の会話では、会話の最初から4人全員が一斉に登場しないようにする、あるいは話者の役割が明確な場面設定をする、といった工夫を加えていきたい。

この他、全体的なこととして、受験者の生活環境や居住地区で差が出ないような問題作成やジェンダーに配慮した問題作成についても継続すべきとの要望があった。読み上げ回数については、国内外で実施されている英語の試験の多くが1回読みを採用しているので、全て1回読みにして問題数を増やすことで、本テストの信頼性と妥当性を高めることができるかもしれないという提案があった一方で、2回読みと1回読みの混在であっても、第1問・第2問の2回読みで受験者が英語の音声に慣れてから第3問以降の1回読みに入る流れがあり、受験者の緊張を解す効果があるかもしれない、との意見もあった。また、英語変種の導入に関しては、国際的に広くコミュニケーションの手段として使われている実態を反映しており、大変良い傾向であると評価された。

4 ま と め

本テストの平均点は56.16点であり、前年度と比べてほぼ横ばいであったが、共通テストでは問題の種類と数が増え、難易度も上がったと考えられることから、受験者が4技能の学習を強化した結果、リスニング力が全体的に向上した可能性が示唆される。

本テストは、センター試験に比べ、より4技能のバランスを意識し、場面設定などを日本語で表記することで、測る力を「聞く力」に集約する措置をとった。また、モノログ、対話、講義、4人の討論といった様々な場面や状況を設定し、高等学校学習指導要領の方針を汲んだものとした。英語の多様化についても一定程度体現化できたと考える。こうした方向性については、今後も継続していきたい。

共通テストが高等学校の授業改善へ及ぼす影響については、高等学校教科担当教員からも示された。英語をコミュニケーションのツールとして使う場合を想定し、生徒自らがそれを体験するような授業設計や指導の在り方を追求すべきであるとの見解は、まさに問題作成部会の意図したことと一致する。

また、教育研究団体からの指摘のとおり、思考力・判断力・表現力等を問うことが目的でありながら、情報処理能力や、それを速く行うことだけを求めるような問題設定となってしまうことは避けるべきであるが、一方で本物のコミュニケーションの場で求められる即時的な対応力は、聴解における基礎力として位置付けるべきであると考えられる。受験者に過度の負担を与えることは避けつつ、聞き取ったことを瞬時に「理解・解釈」できるリスニングの流暢性を高める学習にも是非力を入れてほしい。共通テストが今後も、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」につながる波及効果があるものとなるよう心したい。